

岡本かの子ノート

——「鶴は病みき」を読む——

松島 淨

一 岡本かの子という文学者

わが国の近代文学を代表する作家といえ、鴉外と漱石を挙げる人が多いと思うが、それではその二人に続く三人目の作家は誰かと言われれば即答するのはあんがい難しい。そこにかつて一人の女性作家が位置付けられたことがあった。そうそれが岡本かの子だったのである。岡本かの子といっても今の人は知らない人が多いと思う。しかし実際は「ちくま文庫」で全十二巻の「岡本かの子全集」が出ている。愛読者は少なくないのである。あるいは吉本隆明を知らない人でも吉本ばななのお父さんと言えはわかるように、岡本かの子を知らなくても岡本太郎のお母さんと言えはわかる人もいるかもしれない。以下全集の紹介文を引用する。

岡本かの子は一八八九（明治二十二）年、東京青山に生まれる。本名カノ。生家は多摩川河畔の二子に代々つづいた大地主。跡見高女卒業後、与謝野鉄幹・晶子夫妻に師事、「明星」「スバル」に短歌を発表。「青鞥」にも

参加した。二十二歳で画学生岡本一平と結婚したが、結婚生活の苦悩から仏教を研鑽する。一九三六年発表の「鶴は病みき」によって文壇に登場する。その後四年の間に「金魚繚乱」「老妓抄」「生々流転」などの佳作を発表。一九三九（昭和十四）年二月十八日、脳充血で死去。四十九歳。

ところで岡本かの子が昭和十三年一月に書いた短編に「蕙の門」という作品がある。タイトルの意味は蕙が門に生い茂ったために門が使えなくなった家の者が脇のくぐり戸を使って出入りをしているということである。また家のお手伝いの老女が蕙の芽をちぎって遊ぶ近所の子供たちを叱るといふ話も出てくる。かの子の評伝を書いた瀬戸内晴美もこんなことを書いていた。

「かの子は自然の風情をなつかしんで、庭の落ち葉を故意に掃かせなかった。この当時、岡本家を訪れたある婦人記者は、門を入るなり、ずぶつと靴の埋まってしまふ落ち葉の厚さに驚いたと今も話していた。〔足首までいきなり入ってしまうのよ。ずぼつずぼつと一足ずつ、落ち葉の中からひきあげて歩かなくてはならないんですもの。あの驚きは今でも忘れられないわ〕雑草もまた生えるにまかせて、ある日恒松が掃除するつもりできれいに引き抜いたら、かの子が泣いて怒り出した。そんなかの子の嗜好はついに、門にからまつのびていく蕙の生命力がいとしいと言って、蕙をいたわり門を閉ざしっぱなしにするようになった。人の出入りは、脇のくぐり門を使用した。〔表門を蕙の成長の柵床に閉じ与えて、人間はそばの小さなくぐり門から、世を忍ぶもののように不自由がちに出入りするわが家の者は、無意識にもせよ、この質素な蕙を真実愛しているのだった。〕と、かの子の小説にある一節はそのままかの子の実生活の描写であった。」

私はこれを読んで考えさせられた。これがかの子が学んだ法華経のすべての命は平等であるという思想の表現

なのかということであった。わが家の狭い庭にも蔦が生えているが、これまで家に這うのを嫌がって、はぎ取っていたり生え際を切ったりしていたものである。また自分が絵を描いていたころは例えば藪椿を山から一輪取ってきて、描こうとしている間に、開ききってしまったので、捨ててしまったりした。その頃はそんなことに何も疑問を感じていなかった。そんな自分勝手な行為に疑問をいだくようになってきた。そんなときに岡本かの子の「蔦の門」という小説を読んだのである。しかも時期が隣に伸びた庭木を剪定する必要があるときでもあった。どうしたものか。もともと不精な自分がおさら動けなくなっているのである。今や東の壁に蔦が三本二階まで這っている。南西の小さな庭はサッカーをしている孫たちのために人工芝が張ってあるので雑草も生えなくていいのであるが。道路わきのハナミズキは茂りすぎると街灯の光を邪魔するので切らざるを得なくなる。近所から苦情が出るのである。南側の狭い庭にもきんもくせいとぎんもくせいの二本があり、いずれも二階の屋根まで伸びている。南側の家との境界は二メートルしかないで、ぎんもくせいを伝わった蔦がいつ隣の屋根に伸びるかヒヤヒヤである。岡本かの子が住んでいた昭和十年代の東京青山の一戸建てと現在の神奈川県集合住宅では環境が違うのである。そんな中でも岡本かの子の短編小説は私に大きな衝撃を与えているのである。

二 岡本かの子の短歌

ところで岡本かの子は自分にはラクダの三つのこぶがあると云っている。一つは仏教であり第二は短歌であり最後が小説であると。そこでここでは第二の短歌に注目してみたい。それも先ほどの植物との関連を考慮して、

桜花の歌を中心に紹介してみたい。

桜花いのち一ぱい咲くからに命をかけてわが眺めたり

私はこの歌を読むと、桜を「きれいだね」と言っただけ鑑賞するのではなく、桜の開花に対して人間が全面対決しているように思われる。桜の花も冬の間エネルギーをためて春の開花を精一杯表現しようとしているのだから、人間もただ漫然と眺めるのではなく、桜の開花に負けないように精一杯対決すべきである。そのためには人間も冬の間準備し、体力、精力をつけて全力でその喜びを表現すべきだということである。人間として全力をあげて開花、表現せよということである。

うつらうつらわが夢むらく遠方の水晶山に散るさくら花

岡本かの子は兄大貫晶川にあこがれて文学に導かれたといわれている。晶川とは兄弟が生まれ育った多摩川にちなんで命名したのであり、その源流には水晶山があったと幻想したと考えられる。生命の源流である水晶山に散る桜花とは日本人のふるさとの象徴的な幻想と言ってもいいものだったと考えられる。

玉川の流れの末の末とほく行かばや君の魂に逢はむと

兄晶川は谷崎潤一郎の親友であり、第二次「新思潮」同人であったが二十五歳で夭折した。玉（多摩）川はかの子の実家のそばを流れており、幼いころから兄妹の遊び場であった。心の支えであった兄を失った悲しみと挽歌がこの作品にはこめられている。

つぶらかにわが眼を張ればつぶつぶに光こまき朝桜かも

眼を大きく開いて朝の桜を見ると一つ一つの花がこまかく陰影を見せて光輝いていることがわかる。人間もまた漫然と見ていてはその人の奥行きは見えないものである。しっかりとつぶらな眼を見開いてみると、その人の人間性が見えてくるものである。この後検証する小説のデビュー作「鶴は病みき」にも反映しているのである。

おのづからなる生命のいろに花さけりわが咲く色をわれは知らぬ

自然の花は自由に精一杯いのちの限り咲いているが、人間である自分はずねに窮屈な思いをして、自由におおらかに花咲かせることができない。この人間の難しさに終始付きまとわれている。最近聴いた歌謡曲に「あなたは私に自由と孤独を教えてください」という歌詞があつたのを思い出した。

淡紅の花えんどうを摘む五月わが腕もまろらかに肥ゆ

この歌が収められたのは第三歌集「浴身」で、一九二五（大正十四）年、作者三十七才だった。初夏の晴れた日、スイートピーを摘んでる幸せそうなきがうたわれている。まろらかに脂肪のついた腕を素直に歌っている様子は明るくて好感が持てる。

くれないの花をいとしとわが保尿管（ぼつと）椿がもとにあけて笑ましも

真っ赤に咲いた藪椿を見ているとその美しさと比べようと自分の女性器を開いてみたという何とも微笑ましい歌である。かの子の童女のような純真さをよく表している。

風もなきにざっくりと牡丹くづれたりざっくりくづるる時の来りて

これも「浴身」に収められた一首。牡丹の花の盛りは三日程度と言われている。ざっくりをリフレインすることで、花の散る摂理の厳肅さを表現している。俵万智も指摘しているが、岡本かの子にはリフレインを使った秀歌がいくつもある。

いっぼんの桜すずしく野に樹てりほかにいっぼんの樹もあらぬ野に

かの子はこのような周りの風景を支配するような一本の樹のイメージが好きであった。それはやがて挑戦するつもりであった日本の文学世界に対する彼女の自立の姿勢そのものであった。

しんしんと桜花ふかき奥にいつぼんの道とほりたりわれひとり行く

自分には華やかな桜花の饗宴の奥に特別な神秘的な世界が存在しておりそこへ至る道が見えている。あたかも自分ひとりが招待されているかのようにその世界に入っていこうとしている。自分の才能を自覚しつつあるときの自己愛的な感覚であろう。

知恵の実を食ぶるなべに痩せてかそけいのち自がつひに絶つ

この歌は昭和二年七月に自殺した芥川龍之介への挽歌である。岡本かの子は芥川龍之介と鎌倉にて大正十二年の夏、同宿することになった。かの子はもとも彼の文学に深い共感を寄せていた。事実彼女の文壇デビュー作「鶴は病みき」（昭和十一年）は芥川龍之介をモデルにした作品であった。芥川は知恵の実を食べることに夢中になって生命エネルギーを費やしてしまい、痩せてしまつて、最後は自死せざるを得なかつた。芸術至上主義者として同類意識が強かつただけにその喪失感もおおきかつたと思われる。

三 「鶴は病みき」という小説

それでは小説「鶴は病みき」とはどんな作品だったのであるか。まず書き出しの部分引用してみよう。

「白梅の咲く頃となると、葉子はどうも麻川莊之介氏を想い出していけない。いけないというのは嫌という意味ではない。むしろ懐かしまれるものを当面に見られなくなった愛惜のところが催されてこまるという意味である。わが国大正期の文壇に輝いた文学者麻川莊之介氏が自殺してからもはや八ケ年は過ぎた。

白梅と麻川莊之介氏が、何故葉子の心のなかで相関連しているのか、麻川氏と葉子の最後の邂逅が、葉子が熱海に梅を觀に行つた途上であつたためか、あるいは、麻川氏の秀麗な瘦軀長身を白梅が連想させるのか、または麻川氏の心性のある部分が清澄で白梅に似ているとでもいうためか——だが、葉子が麻川氏を想い出すとぐちは白梅の頃でありながら結局葉子がふかく麻川氏を想うとき場所は鎌倉で季節は夏の最中となる。葉子達一家は、麻川莊之介氏の自殺する五年前のひと夏、鎌倉雪の下のホテル日屋に麻川氏と同宿して避暑していた。」

この冒頭部分を読んだだけでも岡本かの子が名文家であることがわかると思う。人物と背景とそれらにまつわる作者の心情が的確に表現されているからである。私はその背景に彼女が長年「短歌」を詠んできたことがあると思つている。短歌は短い言葉で情景と人物の心性とを表現しなければならぬからである。前述の短歌でも「知恵の実を食ぶるなべに痩せて」という言葉があつたように、当時の芥川龍之介の情況が見事に表現されているのである。生半可な文芸評論家以上のものがある。

「鶴は病みき」は大正十二年の夏、避暑に來た鎌倉の雪の下の平野屋で同宿した芥川龍之介との交遊を描いた

作品である。モデルの麻川は芥川、葉子は岡本かの子、坂本は岡本一平、大川宗三郎は谷崎潤一郎、赫子は谷崎の義妹で「痴人の愛」のナオミのモデルになった石川せつ子、X夫人は秀しげ子、喜久井は菊池寛、川田は川端康成、久野は久米正雄、K氏は画家の小穴隆一である。

ところでかの子はこの小説を書く前に芥川龍之介について短い小論を二つほど書いていた。一つは大正十二年十一月の「新潮」に書いた「今夏の芥川氏」であり、もう一つは大正十五年四月号の「不同調」にかいた「芥川龍之介氏」である。前者はタイトルからわかるようにその年の夏の鎌倉での避暑の体験に基づくものであった。

「芥川氏をよく見ると普通一寸逢った人がよく言うような落ち着いた冷静なひとではない。頭は男性的でしっかりしているかもしれないが、神経は女性のように繊細である。優しい、鋭い、しかし時とすると、ヒステリックに執拗に人を追いかける。これは氏の弱点や欠点に運悪くうかうか触れてしまったものが遭う一つのさいなんである。誰も人間にはどんな偉い人でも欠点も弱点もあるものを、そんなにひしがくしにむきになって取り消したりそれを感じたものに復讐したりしなくてもよさそうなものだとさえ思われる、私などは、それあって、かえって氏の人間味を見出したくらいにかんがえるのに。だが、氏はどこまでも見栄坊なのか勝気なのか。」

「氏と最近の一夏を鎌倉で平野屋別荘で隣居した朝夕の親しみの間に私も随分氏からその手をむけられました。私も随分氏に対して気を付けてはいましたが生来強情な、と同時に突飛なところのある女ですから氏の手におえなかったところがあつたのでしようが、氏も随分独断的でそそっかしくこちらの言葉の真意や心情を思い違いでむだな皮肉や追撃やトリックを用いて骨折り損をされたこともありました。その当時私も内々腹をたてたり（本当にないないでした。私は氏に面と向かつてどんな時でも精一杯氏に対しすぐれた文学者の一人に対する敬意を

忘れてはいませんでした。)あきれたり、少しは軽蔑したりしました。が、大震災の驚愕が私の心の邪気を一掃してくれたのでしょうか、それとも氏の本質がいつまでも人の心に悪感を残して置かぬ徳を持ったためか、私はとにかく、今は隣居の時代の氏を多く親しくすがすがしく思い出すばかりです。」

これが大正十二年の夏にかの子が芥川氏と出会った時の率直な思いだったのであり、この思い出が昭和二年の小説のベースになっているのは間違いない。そのような思いが発生する具体的な出来事を描いたのが小説だからである。この間の詳しい検討は後述するとしてここではもう一つの芥川論「芥川龍之介氏」について紹介しておきたい。これは短いもので全文引用しておきたい。

「私が芥川氏にもっとも接近した機会は今から四五年前です。そのときの印象を私は前に新潮に書きましたが、今あれを少し訂正したいくらいにおもっております。それは芥川氏が婦女子のように小心だという点と何か常にトリックを用うる人のように、そしてそれが人格的に心服できぬように書きましたが、まだ私の氏に対しあの時分稚拙な観察だったと今ではおもいます。今ではこんなにおもっています。すなわち、氏の芸術があまりに大人風ならんとしたその点かなり成功しているが故に氏自身その標準で見るとそこにならぬ矛盾がある。そこに氏を誤解する点が生ずる。今にして思えば氏は全く稚純な性格者である、勉強のため、好みの結果氏のあの老成した作が生まれる、氏の稚純な性格から、稚純、愛すべき稚純の人芥川氏をいま私は感じています。」

小説執筆前に書かれたこの二つの小論は互いに矛盾しており、前者の意見を後者の見解が止揚、克服しているかたちである。短い文章であるが鋭いかの子の批評眼が芥川龍之介の核心を射抜いていることがわかる。芥川自身も後者の文章を喜んで受け入れていた。しかし小説はこの二つの見解を下敷きにして執筆されていることは事

実であった。

四 芥川龍之介と岡本かの子

小説はひと夏の鎌倉での同宿体験を「鎌倉日記」の形で描いたものである。登場人物が文士の「麻川莊之介」となっていて、そのモデルが芥川龍之介であることはすぐにわかる仕掛けになっている。興味深いのは、この同宿者の名前を聞いたときの作者の感慨である。作者はその時のことを次のように書いていた。

「ほう」「葉子の夫は無心のように言ったが、葉子はいくらか胸にこたえてはっとした。」その原因はいくつかわ考えられた。その一つは夫の岡本一平が芥川氏のことを「文壇戯画」として描いていたことである。しかもその情報の出所が文学者のかの子であると芥川氏が思っているだろうということである。しかし本当はその情報源は川端康成であったにもかかわらずである。

その二はかの子が自分の小説の処女作を菊池寛氏に見てもらおうとしたら氏が忙しくてそれを芥川氏に見てもらいなさいと言われ、手紙を書くのであるが、その返事がいつまで待っても来ないということがあった。文壇戯画の情報源を疑われたかともいう疑問が残った。

その三が一番重要であるが、芥川氏が付き合っているといわれているX夫人についてかの子が以前ある雑誌に書いたことがあり、それを芥川氏が読んでいるということがあった。その文章というのが「似非道主義の文学者——私のきらいな男」であり、その内容は

「その文学者は日本一の美文家であると世間も許し、私も信じきっていたのに、その人が、黄色くて細くて粉屋のおかみさんのような女が上手におつくりして、妙なしなをしたのにほればれとしていた審美眼の貧弱さにあされた。時がたつてもその侮辱は、今でもその文学者を日本一の美文家と信じている私のその男に対する尊敬の一小瑕瑾とはなつてしまつたけれど、その夜、その会場における私の侮辱の対象は誰よりもその男であつた。」

かの子はこれを本人にわからないように書いたつもりであつたが、鎌倉の同宿の折に不安に思つていたことがすでにわかつていたことが判明したのである。前にここまで率直に書いていた以上、かの子が不安に思うのは仕方になかつたと思われる。よりによつてこんな人と同宿することになるとは思つていなかったに違いない。しかもその後、その人についての小説を書いて作家としてデビューすることになるわけであるから人間の運命とはわからないものである。かの子自身が一番驚いていたことであろう。しかも問題のX夫人こと―秀しげ子のかの子の第三歌集「浴身」が大正十三年五月に出版された時の出版記念会に出席していたのである。その時の写真も残っているが、秀しげ子のかの子や与謝野晶子などと並んで写っている。特別美人とは思えない。

かの子はその「鎌倉日記」の八回目にこんなことを書いていた。

「麻川氏と私とは、体格、容貌、性格のある部分は、まったく反対だが、神経の密度や趣味、好尚など随分よく似た部分もある。氏もそれをかんじているのか、いわゆるなかよしになり、しんみり語り合う機会が日増しに多くなつた。そして氏の良き一面はますます私に感じられてくるにもかかわらず、何とも言えない不可解な氏が、追々私に現前してくる。それは良き一面の氏とは似ても似つかない、そしてある場合には両面全く連絡をもたないもののようにさえ感じられる。幼稚ともいじわるとも、病的、盲者的、時としてはまた許しがたい無礼の徒と

も言い切れない一面に逢う。」

これがひと月弱の鎌倉での同宿でかの子が感じた芥川氏との関係にまつわる体験内容であった。もちろん小説だからそれらについてのそれぞれ具体的な記述があるわけであるがここではそのすべてを紹介するわけにはいかない。その中から代表的な部分を紹介してみたい。

麻川氏いわく「女の本当の美人なんでものは、男と同じようになかなかすくなくいですね。しかし男がふとある女を思いつめその女にいろいろな空想や希望を積み重ねていくとその女が絶世の美人に見えるようになってきますね。そしてその陶酔を覚ましたくはないと思いますね。そのほうが男にとって幸福ですからね。女から紅や白粉を拭い取って素顔を見るなんか私にはとてもできないことです。だがそれだつていいじゃないですか、それだつて。」氏の言葉の調子はいくらかずつ私をきめつけてかかる。私は「そうですとも」と相槌を打った。すると麻川氏は「ほんとうにそう思うんですか」とますます私を極め付ける。私「ええ」麻川氏「ほんとうに、じゃ何故あなたは、なぜ」「何ですか」と私。(中略)

しばらくして麻川氏が「僕がそういう意味です、僕がある女を美人と認めるとしても異議なしのはずすがねあなたは」私もとっさの場合、きつとなった。

「麻川氏は必死な狡さで、「ふふふ」と笑った。ふと私はX夫人のことを思いついた。」

ここで二人の間で問題になっている「美人問答」の根底には二人の共通の知人である「X夫人」の存在があるということである。そこでその間の事情を理解するために若干の注釈を入れたいと思う。つまりこの間の歴史的背景をわかりやすく列挙しておいたほうが内容がわかると思うからである。

一、まず岩野泡鳴が主催する「十日会」で秀しげ子と芥川龍之介が出会うわけである。その二回目の会に参加していたのが岡本かの子であった。「鶴は病みき」の最初のほうで描かれた麻川氏とX夫人との下りはその時のかの子が見た様子だったのである。それは大正八年九月十日だった。

二、芥川氏とX夫人はその五日後に向島と深川でデートしたといわれている。(高宮檀「芥川龍之介の愛した女性」)

三、大正十一年春、芥川氏は大阪毎日の海外視察員として中国に行く。上海到着早々乾性肋膜炎にかかり入院する。三週間後に退院し、その後四か月間中国を視察をする。しかし帰国後も健康がすぐれず、様々な病に悩まされることになる。この時の氏の病気のこととはかの子も心配していた。

四、大正十一年一月「藪の中」を新潮に発表する。この作品が芥川氏と秀しげ子と芥川氏の門下生であった南部修太郎との三角関係を暗に描いた作品だと解釈する説もある。(前掲書)

五、「ある阿呆の一生」は彼の死後に発表された作品であるが、その二十二に「狂人の娘」という短文がある。「二台の人力車は人気のない曇天の田舎道を走っていった。その道の海に向かっていることは潮風の来るので明らかだった。後ろの人力車に乗っていた彼は少しもこのランデ・ブウに興味のないことを怪しみながら、彼自身をここへ導いたものなのであるかを考えていた。それは決して恋愛ではなかった。もし恋愛でないとしたら、彼はこの答を避けるために「とにかくわれらは対等だ」と考えないわけにはいかなかった。前の人力車に乗っているのはある狂人の娘だった。のみならず彼女の妹は嫉妬のために自殺していた。

「もうどうにもしかたはない」彼はこの狂人の娘に、動物的本能ばかり強い彼女にある憎悪を感じていた。(以

下略」この前半の人力車は二に書かれた二人のデートの様子だという解釈がある。(前掲書)

六、かの子の「浴身」の出版記念会は昭和十四年の五月に開催され、それにも秀しげ子は出席していた。その他与謝野晶子や吉屋信子、菊池寛なども参加していた。その写真も残っている。

関連図書としては一、高宮檀「芥川龍之介の愛した女性」彩流社、二〇〇六年

二、中田睦美「芥川龍之介の文学と噂の女」翰林書房、二〇一九年)

以上のような背景の下で、二人の美人問答が展開されていたのである。この二三日前にもある美人談義が交わされていた。それは葉子が海岸から帰る途中で非常な馬上の美人にあつたと麻川氏に報告したときに麻川氏が言うことは「非常な美人？ははあ、あなたに美人の定見がありますか」(中略)「その女が馬上にいたんで美人にみえたんでしよう」私「馬上だからなおスタイルが颯爽としてたんでもありませんがね私の言うのは顔なんです。素晴らしく均整の取れてる顔が、馬上でほんと赤らんでいましたの」「ははあ」と麻川氏はどうも遺憾でたまらない様子だ。「由来均整のとれてる顔には莫迦が多いですな」(写真で見る限り麻川氏の奥さんの顔は均整の取れた美人顔だった)

この間、葉子は麻川氏とX夫人が出会ったかつての会合のことを繰り返すことになるが思い出していた。「巧みな化粧で変貌したX夫人を先年某料亭で見て変貌以前を知っている私が眼前のX夫人の美に見ほれながら麻川氏と一緒に単純に讃嘆できなかったこと、その気持ちでその時の麻川氏を批判した随想をある雑誌に絶対に氏やX夫人の名前を明記しないで書いたのが、やはり麻川氏は読んで感付き気持ちに含んでいたのだとわかった。(中略)なんとというしつこい氏の神経だ。」

またある時麻川氏が葉子にこんなことを言った。突然私の紹縮緬の単衣の袖をつまんで「X女史にこんな模様は似合うな」と決定的に言った。私は「あの方には無地でこの色（小豆色）だけなのがいいでしょうね」といった。すると麻川氏の顔にみるみる冷笑がわいた。「あなたの主張はそうですかあ、あなたあの人の衣装持ちにヤキモチ焼いていませんか」終わりの一句（これは普通の眼鼻を持っている同志が面と向かって言い合う言葉ではない。氏は氣違いじゃないかな。と私はとっさの場合思った。）は私、いとこをむしろ驚愕させて氏の顔に目を集めさせた。ところが意外にも氏の顔には、今が今、自分の口から出た言葉に驚愕し狼狽している色が私たちの驚愕以上に認められた。

またある時麻川氏は大まじめに、「あなたんとこへまだ随分たくさんの方が東京から来るんでしょ。およそなん人以上まだ来る予定ですか」私「わかりません」麻川氏「それらの人たちがですな、いちいち僕を頭において帰るんじゃ、やりきれない」

葉子はこのことがいろいろあつて病後の、およそ一か月余りの鎌倉滞在中にすっかり疲れてしまい、夫の勧めもあつて、東京に帰る当日に関東大震災が起こるのである。

岡本かの子はこの小説の最後を次のような言葉で、しめくくっている。

五 五年後の芥川氏との再会

「葉子はこの日記が終わった大正十二年八月下旬以来、昭和二年春まで、足掛け五年も麻川氏に逢わなかった。

昭和二年の早春、葉子はちょっとした病後の気持ちで熱海の梅林がみたくなり、夫と新橋から汽車に乗った。すると真向かいにシートから立ち上がった、やあと懐かし氣に声をかけたのは麻川氏であった。なんとという変わり方。葉子の記憶にある限りの鎌倉時代の麻川氏は、どこかうんだうすぐろさはあつてもまだまだ秀麗だった麻川氏が今は顔が細長くなり丸く禿げ上がり、老婆のように皺んだ頬をこわばらせた、奇貌を浮かして、それでも服装だけは昔の儘の身だしなみで、竹骨に張った風紙のようにしゃんと上衣を肩に張り付けた様子は、車内の人々の注目をさへひいている。葉子は麻川氏の病弱を絶えず噂には聞いていたが、こうまで氏をさいなみ果たした病魔の所業に今更深く驚かされた。病氣は支那旅行以来のものが執拗に氏から離れないものらしい。だがつくづく見れば今の異形の氏のおくから歴然と昔の麻川氏のおもかげは見えてくる。葉子はそのおもかげを鎌倉で別れて以来、日がたつにつれどれほど懐かしんでいたかしのれない。葉子の鎌倉日記に書いた氏との葛藤、氏の病的や異常がかえって葉子に氏を懐かしく思わせるのはなんと皮肉であろう。

「私ずっと前からお会いしたかったです。」

五年の歳月が、葉子を素直にはつきりしたものの言える女にしていた。

「ほくも」

氏の声はまたなんとという心の傷手から滲み出した切実な声になったことだろう。

「鎌倉時代に私はもつと素直な気持ちであなたにお付き合ひすればよかつたと思っていました」

「僕も」

「ゆっくりお打合せして、近いうちにおめにかかりましょうね」

「ぜひそうしてください。旅からお帰りになったら、お宅にいつ頃うかがってよいか、お知らせください。ぜひ」
そして立ち際に「あなたが二度目に書かれた僕の批判は全く当たっていますありがとうございます。」といった。

「すっかりやられたんだな」

葉子の夫も独り言のようにいつたきりだまっていた。

その日の夕刻、熱海梅林の鶴の金網前に葉子は立っていた。(中略)

今は素立ちに立った一羽、梅花を渡るうすら冷たい夕風に色あせた丹頂の毛をそよがせ蒼冥として暮れる前面の山々を淋しげに、見上げている。私ははかなげな一羽の鶴の様子を見ているうちに途中の汽車で別れた麻川氏がしきりに思われるのであった。

「この鶴も、病んではかない運命の岸を辿るか」こんな感傷に葉子は引き入れられて悄然とした。」

この最後の部分が今回の小説のタイトルに使われたわけである。この鶴の比喩で締めくくるあたりにかの子の短歌で培われた表現方法が面目躍如であると思われる。かの子について短歌か小説かなどとその表現方法について議論するなどは全くナンセンスだと私は思う。そんな狭い議論などを超越したところにかの子の世界は存在しているからである。今回の私のノートは全くの入門的な紹介でしかなかったけれど、少しでも興味を懐いてくれたらとおもうばかりである。

最後にこの小説の最後の部分を引用してこのノートを終わりたい、

「その年の七月、麻川氏は自殺した。葉子は世人と一緒に驚愕した。世人は氏の自殺にたいして、病苦、家庭苦、芸術苦、恋愛苦あるいはもつと漠然と透徹した氏の人生観、一つ一つ別の理由を当てはめた。葉子もまた、だが、

葉子にはあるいはそのすべてが氏の自殺の原因であるようにも思えた。

その後世間が氏の自殺に対する驚愕から遠ざかっても葉子の氏に対する関心は時を経てますます深くなるばかりである。とりわけ氏と最後に逢った早春白梅の咲くころともなれば、そしてまた年毎に七八月の鎌倉をおもい追憶の念を増すばかりである。

また画家K氏のT誌に寄せた文章によれば、麻川氏はその晩年の日記に葉子を氏の知れる婦人の中の誰よりも懐かしく聡明なるものとしてさえ書いている。それが葉子の思いを一層切実にさせるといふのは葉子は熱海への汽車中、氏に約した会見を果たさなかつた、氏と約した通り氏に遭い氏が仮にも知れる婦人の中より選び信じ懐かしんでくれた自分が、鎌倉時代よりもずっと明るく寛濶に健康になつた心象の幾分かを氏に投じ得たなら、あるいは生前の氏の運命の左右に幾分か役立ち、あるいは氏の生死の時期や方向にも何らかの異動や変化がなかつたかも知りたいと氏の死後八九年経た今でもなお深く悔い惜しみ嘆くからである。これを葉子という一女性のいたずらなる感傷の言葉とのみ読む人々よ、あながちに笑い去り給うな。」

私はこれを読むと葉子は麻川氏のことを心から愛しく懐かしんでいたことがわかるのである。